

街で見つけたアートの採集箱 29

浅草の間屋街に残る旧小学校校舎で 繰り広げられたクリエイターたちの挑戦

舞台は「廃校となった小学校」。美術作品展示のための空間ではない場所に集まった日本とベルギーの20数名の現代作家たちが、極めて実験的なこの試みに奮闘した。



日本からは伊藤七男、川嶋敬子、土屋辰、松枝秀晴、水留周二、八百板力、山本伸樹など12名が、ベルギーからはT・ショットーら11名が参加した



会場からのインスピレーションで生まれた、墨と朱による制作風景



美術館の規制を解かれた作家はのびのびと作業する

浅草の廃校で4月7日から2週間行なわれた日本とベルギーの美術交流展。2年の歳月をかけ、この企画はなんとか実行にこぎつけた。現代美術の可能性を拓けるような全く新しいタイプの交流展を開きたいアーティストたちが話しているうちに生まれたアイデアが、そもそものきっかけだった。企画にあたってこだわったキーワードは3つ。〈展示会場〉(現地の制作、そして「コミュニケーション」)。

まず会場だが、日常とそうかけ離れていない、それも、決して美術のために用意されたのではない空間を使おうと決めた。美術館や画廊に置かれるという無意識の前提を取り去った時、一体アーティストたちが何を試みるのか実験してみたかった。横浜の赤レンガ倉庫や米軍キャンプ地、根岸の競馬場、古い病院など様々な会場候補地が集められた。しかし、都内近郊で、約1カ月という期間を自由に使えて、かつ、このコンセプトに見合う空間がそう簡単に見つかるわけがない。そんな中で目をつけたのが、折からの土地高騰、人口流出によって増えつつある廃校である。だが実際調べてみると、たいていほかの学校の建て直しなどの仮校舎になっている場合がほとんどのようだった。唯一、現在使用せずに残っていたのが、西浅草にあるこの旧金竜小学校だった。合羽橋道具街のはずれ、下町情緒あふれるこの場所と、現代



日本での会場となった旧金竜小学校は昭和3年の建物



板張りの広い教室は、実は格好のアトリエだった

美術が出来る。これはなかなかおもしろいシチュエーションになるに違いないと確信した。台東区の施設課に許可申請をしたが、前例のないこの申し出に彼らが戸惑うのも無理はない。区長さんや町会長さんにも頭を下げ、度重なる交渉の末ようやく許可をいただいた。ふたを開けてみると、地元の商店街の人々から差し入れをいただいたりと、思いがけないコミュニケーションも始まった。従来行なわれてきた交流展のほとんどは、作品がただ運ばれ、まさにできあがったものを前にして他国の作家と会話する程度である。これでは真の文化交流とはいえない。それで今回は、制作過程、それこそ材料調達から仕上げに至るまで、すべて作家同士のコミュニケーションによって成り立つような状況にした。どこで何を買ったらいのかわからないベルギーの作家を日本の作家が細かにサポートする。隣の教室で制作中の作家同士が、合間に廊下で互いの作品について立ち話をする。言葉や考え方がうまく通じないものか、さはあるものの、互いに新たな発見を繰り返す。普段の彼らよりずっと生き生きとした表情だった。そして校舎のあちこちに作品は完成した。様々な点で触れ合いながら進められた交流展。これを機に、参加作家一人一人が次のステップを踏み出すだろう。次回は今秋、今度はベルギーで行なうが、これも大いに期待している。(酒井信一)



長い廊下のスペースを生かした作品。竹は当然日本で調達